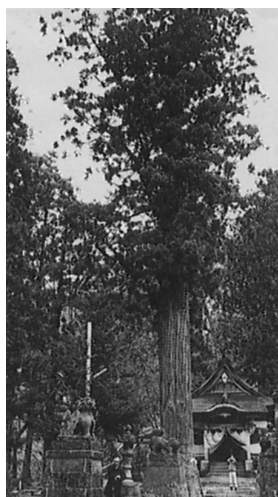


天
然
記
念
物



山腹中の大杉



境内前の大杉

天然記念物 大杉

所在地 黒石市大字南中野字不動館二六
所有者 中野神社

中野山は見事な紅葉で有名であるが、その中腹に三本の大杉が一際高く立っている。中野神社の社殿前に一本、社殿から展望所に上る階段の途中に一本、社殿西側の山腹に一本、計三本の大杉が生育している。

社殿前の大杉は、樹齢五百年、樹高三四m、根元幹周一〇・九m、幹周五・二六m。

社殿裏側の大杉は、樹齢六百年、樹高三六・五m、根元幹周一四・三五m、幹周六・九m。

西の山腹にある大杉は、樹齢七百年、樹高四二・五m、根元幹周一三・五m、幹周六・一五mで、いずれもスギ科スギ属スギの巨木である。

杉は日本特産の常緑高木で、植栽分布は北海道月形町円山公園を北限とし、南は鹿児島県屋久島まで生育している。自然分布地域は、西津軽郡矢倉山を北限とし、屋久島を南限とする。全国的には北山スギ、秋田スギ、吉野スギなどがよく知られているが、津軽地方に生育しているスギは、秋田スギ系とみられている。

津軽地方には大杉が多い。県天然記念物の弘前市巖鬼山神社の大杉二本（ともに推定樹齡千年、樹高四一m）や深浦町の県天然記念物「関の杉（別名・甕杉）」（推定樹齡千年、樹高三五m）等がある。これらと比べても、中野神社の大杉は津軽地方の巨木として評価される立派なものである。



天然記念物 中野のモミジ

所在地 黒石市大字南中野字不動館二六

所有者 中野神社

中野神社の鳥居の階段を下っていくと、三本のモミジがある。カエデ科カエデ属のイロハモミジで、いずれも樹齢が約二百年である。

向かって左側の木は、樹高八・七m、幹周三・二・三m。右側の木は樹高一〇・七m、幹周二・四m。中央のモミジは幹周二・六mで、樹高は測定不能である。いずれも樹皮に衰弱の徴候が見られるものの樹勢は旺盛で、全体が平頂で典型的なモミジの樹形をしている。

青森県はイロハモミジの自然分布区域には含まれないため、このモミジは栽植されたものであることがわかる。

このモミジには、次のような由緒がある。

黒石七代領主津輕典暁つねとしの時代、享和二年（一八〇二）九月二十六日に弘前藩九代藩主津輕寧親やすちかが温湯村ぬるゆむらに一泊した。中野山のモミジをはじめ中野川の滝に魅せられた寧親は、京都からカエデの苗木約百種百本を取り寄せ、翌年四月十三日中野不動尊へ奉納し、自ら現在の場所に三本のモミジの苗木を手植えた。それ以来、中野の紅葉はより有名になり、京都の紅葉の名所である「嵐山」に対し、中野は「小嵐山」と呼ばれるようになった。

寧親は、黒石五代領主津輕著高あきたかの六男として江戸で生まれ、父の死後、十四才で六代領主になった。寛政三年（一七九一）六月、弘前藩八代藩主津輕信明のぶあきの急死に伴い末期養子に迎えられ、四万六千石を継いで、弘前藩九代藩主になった。

黒石領主時代の寧親の業績はあまり多くないが、弘前藩主になってからは、十萬石への昇格をはじめ、弘前城本丸隅櫓すみぐら（現天守閣）の造営や藩校稽古館けいこかんの創設など文武諸政策に力を発揮した。さらに黒石に六千石の蔵米を与え、一萬石の大名とさせ、黒石領から黒石藩への昇格に貢献した。

この中野のモミジ三本は「お手植えのモミジ」と呼ばれ、その保存が図られている。

天然記念物 袋のイチヨウ

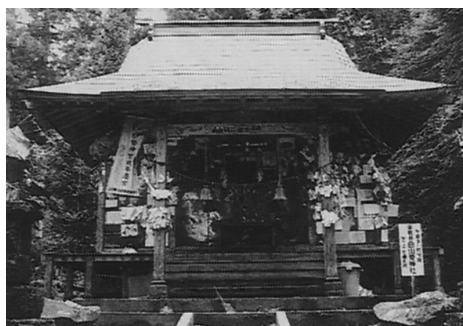
所在地 黒石市大字袋字富山一―二―一―
所有者 白山姫神社



白山姫神社しろやまひめの鳥居の側に大きなイチヨウの木がある。推定樹齡四〇〇年、樹高二七・七m、根元幹周七・六〇m、胸高幹周五・六五mの雌木で、古くから袋の神木として親しまれている。

このイチヨウの木には、次のような伝説がある。

大永年間だいえい(一五二二―一五二七)は台風が多い年で、大風が吹き荒れたため、神木が倒れ、社殿も壊



れた。そこで当時、別当職べつとうしやくであった工藤衛門之介が庭にイチヨウの木を植えたのである。それ以来、イチヨウの木は「袋観音の神木」として住民に崇拝され、大木に生育した。県内でも五本の指に数えられるほどの大木で、中弘南黒地方では、弘前城跡二ノ丸のイチヨウの木に匹敵する古木である。

〈白山姫神社〉

白山姫神社しろやまひめは、別名「袋観音堂」といい、大同年間だいてう（八〇六～八〇九）に坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろが創建したと伝えられている。文明年間ぶんめい（二四六九～八六）のころ、南部大膳大夫なんぶによって再建され、天明八年てんめい（一七八八）に御堂が現在の地に移された。現在は、津軽三十三観音霊場の二十七番目の札所になっており、袋の観音様として古くから参詣者が多い。



天然記念物 村上家のイチイ

所在地 黒石市大字上十川字柳沢四一
所有者 個人

村上家は、浅瀬石城十代城主千徳政氏せんとくまささうじの家老を務めた村上理右衛門一族の子孫で、慶長二年（一五九七）、津軽為信たみのぶにより浅瀬石城が落城した後、現在の地に移住したといわれている。この時庭園を造り、イチイの木等を植えたという。

イチイの木は、別名「オンコ」あるいは「アララギ」ともいわれる常緑高木である。

村上家のイチイは、樹高五・二〇mである。推定樹齢は三百年以上で、主枝しゅしの一部に老化が認められるが着葉状態はよく、樹勢も良い。

樹形は四方に主枝を放出させて段作りの刈り込みをしている。最下位主枝を地面沿いに伸ばして低い



刈り込み仕立てにしている。そのため、全体の形は片枝流し作りの大刈り込みで、それは順風満帆の「宝船」が浮かんでいる姿を模写しているようである。

枝張りは全周三五mで、南北に一四・二m、幅六・〇mにも及ぶ。北側が丸味を帯びているのに対して、南側は船の先のように狭い張り方をしている。

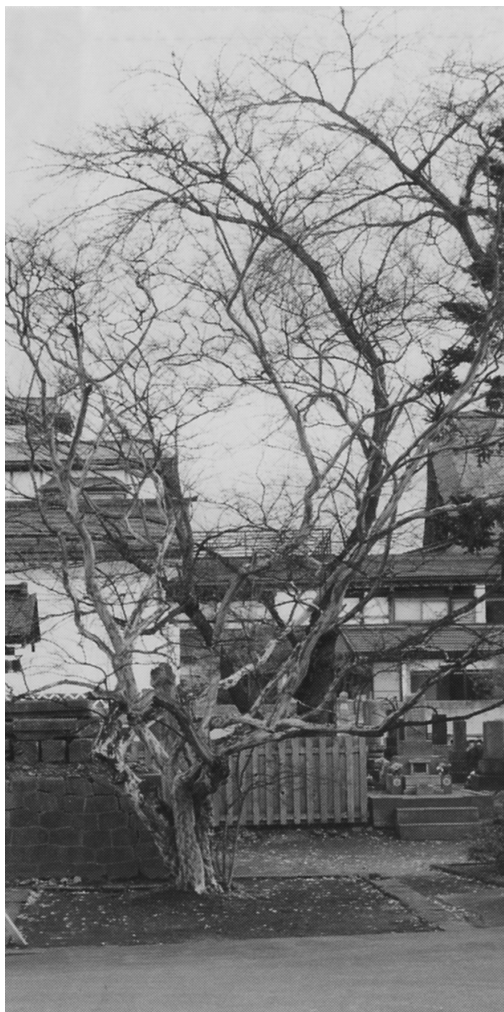
このイチイの木は、大きさ・樹齢の面において弘前市の梅林寺ぼりんじや革秀寺かくしゅうじのものには及ばないが、

「宝船」を模した形はこの雪国において長い年月をかけて丁寧に作り上げたものであり、その樹姿は大いに評価されるものである。

天然記念物 サルスベリ

所在地 黒石市京町字寺町一五

所有者 感隨寺



感隨寺かんずいじのサルスベリは、樹高九・五m、幹周一三〇cm、根元周一九〇・五一cm、推定樹齡三百年の樹木である。サルスベリは中国原産のミソハギ科の落葉小高木で、樹高は数メートル程度であるが、感隨寺のサルスベリは県内でも珍しい大木である。木の表面がすべすべしており、サルも登りにくいということから、このような名称が付けられた。

サルスベリは「百日紅」とも表記するが、これは夏から秋にかけて真紅の花が咲き、花が百日も長い間咲き続けることからこのように言われている。津軽地方では、弘前市革かく秀寺しゅうじのサルスベリが古木で有名であるが、これにも劣らぬ樹木である。

サルスベリがいつ頃日本に伝来したかについては不明であるが、延慶三年えんげい（一一三〇）頃に出された『夫木和歌抄ふぼくわかしょう』の中に見られることから、鎌倉時代以前に存在していたと思われる。また、サルスベリの木は加工しやすいことから、床柱、ステッキ、ろくろ細工などに使用されている。

天然記念物 高田家の糸ヒバ

所在地 黒石市大字二双子字十川八二

所有者 個人



高田家の糸ヒバは、樹高一〇・五m、幹周り二・七二m、枝下の高さ二・〇m、枝張りが南側四・七m、北側四・四五m、東側三・五〇m、西側三・三〇mで、樹齡三百年以上の老木である。

糸ヒバは正式樹種名をヒヨクヒバ（比翼桧葉）といい、サワラの変種である。高田家の糸ヒバも一部においてサワラに枝変わりしている箇所がある。

樹木医の診断によると推定樹齡からかなりの老木であり、幹や大枝に傷や空洞が若干みられたり、葉の状況においてもやや異常があるが、全体的には順調に生育している。また、同種としては県内有数の古木である。



天然記念物 安入のハリギリ

所在地 黒石市大字高館字乙高原一八一二
所有者 個人

ハリギリは、ウコギ科ハリギリ属の落葉高木で、日本では北海道から九州まで広い範囲に自生している。

安入あんじゅうのハリギリは、安入集落の入り口の、小高い道路交差点の分岐地に生育しており、道標としての役割を果たしていたと考えられる。樹齢は約四百年で、根元には文化十一年（一八一四）の石碑が建立されていることから、地域住民の御神木として古くから存在している可能性が高い。

樹高は二三・五m、幹周り五・二mで、県内だけでなく全国でも有数の大木であり、貴重である。